

選評

古川 萌

ジョルジョ・ヴァザーリと「画家の礼拝堂」—彫像のまなざしと死者の顕彰—

本論考はフィレンツェ市内に位置するサンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂北西側に付随する、通称「画家の礼拝堂」と呼ばれる聖ルカ礼拝堂の内部装飾を対象としている。1570年に開始され75年に完成された礼拝堂内部は、12の壁龕の中に納められた彫像と3点の絵画作品から構成されていた。筆者は19世紀に大幅な改築が施された同礼拝堂当初の内部装飾を再構成し、礼拝堂が果たした機能を同時代の歴史的な文脈の中で考察する。

筆者は同礼拝堂が画家、建築家、著述家ジョルジョ・ヴァザーリが中心となり1563年に創立した、美術アカデミーの最初期にあたる「アカデミア・デル・ディセーニョ」の礼拝堂としてアカデミアの活動の拠点であった事実に注目する。このアカデミアの前身であった聖ルカ同信会「コンパニア・ディ・サン・ルカ」は15世紀半ばに衰退し、同コンパニアがもはや果たせなかった、死亡した構成員にふさわしい葬儀と埋葬をおこなうという主要な役割をアカデミアが継承し、「画家の礼拝堂」はこれらの儀式の重要な「場」に充てられた事実を筆者は強調する。さらに筆者は、ヴァザーリが公刊した『芸術家列伝』の第1版（1550年）でも第2版（1568年）においても芸術家の追悼の要素が多く含まれていることに留意しながら、第2版で加えられた装飾枠に飾られた肖像画を「芸術家を祀る記念碑」として構想されたとする解釈を提示する。このいわば追悼する紙上の記念碑を造形化する試みとして、第2版刊行の2年後に造営が始まる「画家の礼拝堂」の室内装飾をとらえ、ヴァザーリが制作のみならず構想段階でより積極的な関与をおこなった可能性を明示する。一見異なる表現媒体を超えて造形意図を考察する筆者のしなやかな感性は特筆に値する。

ついで筆者は、同礼拝堂内の葬儀の様相を記した同時代史料を踏まえて、「画家の礼拝堂」の現在の空間でも特徴的な、彫像の「突き刺さる」まなざしが、追悼演説を聞くアカデミア会員に向けられていたとする刺激的な仮説を提示する。先行する、例えばサン・ロレンツォ聖堂メディチ家礼拝堂に比して、彫像のまなざしが「比較的単純で直線的な」印象をもたらす点は、1563年に終了した、より明快な造形表現を求めるトレント公会議との関連を指摘しながら、同礼拝堂の絵画作品は複雑な画面構成を備えている事実を喚起するなど、筆者は同時代の歴史状況を踏まえて熟慮に満ちた一連の考察を展開している。

吟味された構成と周到な論述を備えた本論文は高い完成度を示しており、文献とイメージの史資料を確たる歴史認識にもとづく優れた感性によって分析する研究方法は異なる専門分野でも参考となるであろう。以上の理由により、古川萌氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称えるものとする。